

J・F・クーパーの娘：
スーザン・フェニモア・クーパーの『いなかの生活』
を読む

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 清敏 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/1014 |

J・F・クーパーの娘：スーザン・フェニモア・ クーパーの『いなかの生活』を読む

村 上 清 敏

序

本稿の目的は、Susan Fenimore Cooper (1813-1894) の代表作 *Rural Hours* (1850) の紹介にある。父親である James Fenimore Cooper (1789-1851) の方は「アメリカ最初の大作家」¹⁾ としての名声が確立し、一連の『革脚絆物語』はアメリカ文学史のキャノン中のキャノンとなっている。だが、その偉大な作家に娘がいて、その娘が父親の口述筆記をおこない、父の死後、その全集に序文を付け、遺産管理人になった以外に、自らも作品を著していたという事実を知る人は少ないだろう。

筆者自身、スーザン・フェニモア・クーパーの名前を知ったのは、ローレンス・ビュエルの大著²⁾ を通してであったことをまず告白しておかなければならない。ビュエルは『いなかの生活』を、「不当に無視された書」「不当に忘れられた書」³⁾ と呼んでいた。5年前のことであり、以後、1968年にシラキューズ大学から出版された1887年の縮刷改訂版『いなかの生活』⁴⁾ を入手し、読み出してみると、これがなかなか面白い。これこそがギルバート・ホワイト直系のネイチャーライティングというものではないか、アメリカン・ネイチャーライティングの原型は、ソローの『ウォールデン』にではなく、この『いなかの生活』にこそ求めらるべきではないかという感を強くした。

なぜ今までこんな重要な作家、作品を見落としてきたのかと不思議に思っ
て、アメリカン・ネイチャーライティングの代表的な3冊のアンソロジー、
トマス・J・ライアン編⁵⁾、ロバート・フィンチとジョン・エルダー編⁶⁾、スコット・H・スロヴィックとテレル・F・ディクソン編⁷⁾ をひっくり返してみたが、
作品の収録はおろか、どこにも一言の言及もない。幸い、二巻本の『アメリカン・
ネイチャーライターズ』⁸⁾ には「スーザン・フェニモア・クーパー」の
項目があり、ルーシー・B・マドックスの行き届いた紹介文によって、本国に
はスーザンに言及した数少ない幾冊かの研究書、論文が存在することも知っ

た。最近出版されたばかりのソローの研究書にも、『いなかの生活』と『ウォールデン』を比較検討した論文⁹⁾が収録されているところをみると、ビュエルの著書あたりを契機にして、アメリカの一部には、おそまきながらスーザン・フェニモア・クーパー見直しの動きが生まれつつあるのかもしれない。メリー・オースティンの再評価がなされ、それに繋がる女性ネイチャーライターたちが次々と紹介・研究され、エコフェミニズム批評が華々しく展開されている昨今、その元祖となるべきスーザン・フェニモア・クーパーに対する冷遇ぶりは、むしろ奇異な感じさえ受けてしまうくらいだ¹⁰⁾。

我が国においては、野田賢一氏の論文¹¹⁾に、『家庭版ピクチャレスク』への寄稿者のひとりとしてスーザンの名前に言及がある以外は、筆者の知る限りでは、スーザン・フェニモア・クーパーに言及した論はないはずである。

1 スーザン・フェニモア・クーパーの略年譜

平凡社刊『アメリカを知る事典』¹²⁾には「クーパースタウン」の項目がある。その全文は以下の通りである。

ニューヨーク州中部の町。人口2342(1980)。人口のわりにこの町が有名なのは、1839年アブナー・ダブルデーが、ここで野球を創案したといわれるからで、百年祭では国立の野球殿堂 National Baseball Hall of Fame and Museum(1939設立)が設けられた。氷河湖であるオツィーゴ湖の南岸にあるこの町は、作家 J・F・クーパーが壮年時代を過ごした所で、町名は彼の父で町の創立者でもあるウィリアム・クーパーにちなむ。

本稿にとって重要なのは、この説明の後半部分であり、スーザンは祖父が入植・設立したこのクーパースタウンに、23歳から死を迎える81歳まで都合58年間にわたって生活し、この村およびオツィーゴ湖周辺を舞台にして、代表作『いなかの生活』を執筆・出版することとなる。先に言及したマドックスの紹介文、シラキューズ大学版『いなかの生活』に付されたトマス・F・オドーネルの緒言、デイヴィッド・ジョーンズの序文などを参考にしながら、スーザン・フェニモア・クーパーの略年譜を作成しておきたいと思う。

1789年 父方の祖父であるウィリアム・クーパー、クーパースタウンを設立。
同年9月、ジィムズ・フェニモア・クーパーが生まれる。

- 1810年 ウィリアム・クーパー、*A Guide in the Wilderness ; or, The History of the First Settlement in the Western Countries of New York with Useful Instructions to Future Settlers* を出版。
- 1813年 4月17日、ニューヨーク州ママロネックでスーザン・フェニモア・クーパー誕生。スーザンが1歳にもならないうちに、一家はクーパーズタウンに引っ越す。
- 1817年 一家はニューヨーク州スカーズデイルに引っ越し、農業を始める。スーザン、母から勉強の手ほどきを受ける。
- 1820年 ジェイムズ・フェニモア・クーパー、処女作『用心が肝心』を出版。
- 1822年 一家はニューヨーク市に引っ越す。主として、娘たちの教育を考慮しての引っ越しであり、女子寄宿学校の隣のビーチ・ストリートが一家の引っ越し先であった。
- 1823年 ジェイムズ・フェニモア・クーパー、『開拓者たち』を出版。
- 1826年 合衆国では娘の教育のためのまともな学校が見つからないと思った一家は、ヨーロッパに引っ越し、パリに居を構える。娘たちは、その地で音楽、絵画、ダンス、文学、歴史、言語の素養を身に着ける。スーザンは 4カ国語を修得し、友人にはエレガントなフランス語で手紙を書いた。一家はスイスやイタリアにも足を伸ばした。このヨーロッパでの7年に及ぶ体験が。後に『いなかの生活』に生かされて、作品に幅と深みを与えることになる。
- 1831年 18歳のスーザンは、父の口述筆記者兼秘書の仕事始める。これは、1851年、父が死を迎えるまで続く。
- 1833年 11月、一家はニューヨーク市に戻る。
- 1836年 クーパーズタウンに引っ越し、オツィーゴ・ホールに住む。以後、スーザンは終生、この地を離れなかった。

- 1846年 スーザン・フェニモア・クーパー、「アマベル・ペンフェザー」の匿名で小説『エリノア・ウイリス：ロングブリッジの若者たち』を出版。長い間、父の手になる作品と考えられていた。
- 1850年 『いなかの生活』出版。祖父の *A Guide in the Wilderness*、父の『開拓者たち』と並んで、親子三代、クーパーズタウンを舞台とした作品を書いたことになる。父は出版元であるプットナム社と掛け合い、出版条件を交渉するなど、大活躍であった。父は妻に向かって「一般大衆はこの作品をどう扱って良いか分からないだろう」と打ち明けたが、作品は父の予想を上回る売れ行きで、同じ年に、イギリスのベントリー社も二巻本として出版する。イギリスでは1840年代以降、植物学が大人気だった。
- 1851年 プットナム社から挿し絵入り豪華本『いなかの生活』が出版される。
- 1852年 ウィリアム・カレン・ブライアントが編集した『家庭版ピクチャレスク』が出版。スーザンも“The Dissolving View”を寄稿。
- 1853年 イギリスのナチュラリスト、ジョン・レオナルド・ナップの『イギリスの田舎の逍遙：あるナチュラリストの日記』を編集し、序文を書き、注を付けて出版。
- 1854年 『いなかの生活』の挿し絵入り豪華本が、フィラデルフィアの出版社から再出版。さまざまな作家による自然詩のアンソロジー、『田園生活の詩歌と分別：新旧の広がりからの抜粋』を編集出版。ソロー、『ウォールデン』出版。
- 1855年 イギリス版『いなかの生活』が『合衆国のあるナチュラリストの日記』とタイトルを変えて再出版。
- 1858年 『ヴァーノン山：アメリカの子供たちへの手紙』を出版。ジョージ・ワシントンゆかりのヴァーノン山保全の基金集めを目的としたもの。

- 1861年 父の作品のアンソロジー、*Pages and Pictures, from the Writings of James Fenimore Cooper, with Notes by Susan Fenimore Cooper* を出版。
- 1868年 新たな序文を付した『いなかの生活』を出版。電信、ガス灯の普及、鉄道の敷設を指して、「歴史上のこうした出来事を嘆いていいのか、喜んでいいのか分からない。悲しいかな、進歩が必ずしも改良であるとはかぎらない」と序文に記す。
- 1876年 ホートン・ミフリン社出版のジェイムズ・フェニモア・クーパー小説全集32巻に序文を付け始める。全集の出版は1884年まで続く。
- 1877年 父の海軍時代の仲間、シュブリックの経歴を綴った、*Rear-Admiral William Branford Shubrick, A Sketch* を出版。
- 1887年 改訂版『いなかの生活』が出版される。元の序文を再録したものであり、意味を失った統計、簡単な天候に関する記述、聖書をもとにした教訓的な記述など、200頁近くが削除された縮刷版である。「後の生活」が追加されている。
- 1890年 *William West Skiles : A Sketch of Missionary Life at Valle Crucis in Western North Carolina, 1842-1862* を出版。
- 1894年 12月31日、81歳で死去。父の監督の目が厳しかったせいもあって、生涯独身であった。なお、1912年にスーザンの甥であるジェイムズ・フェニモア・クーパーが出版した *Legends and Traditions of A Northern County* によると、晩年のスーザンは耳は遠く、目も悪かったが、神憑り的な特異な能力の持ち主として知られていた旨が記されている。また、1917年、ラルフ・バーズオールが出版した *Story of Cooperstown* によると、この「小説家[ジェイムズ・フェニモア・クーパー]の娘」はもっぱら町の慈善事業に献身した人物として記憶されている。

2 ネイチャーライティングとしての条件を備えた『いなかの生活』

スーザン・フェニモア・クーパーの『いなかの生活』がまっとうなネイチャーライティングであり、それゆえ、もっとまともな評価を受けてしかるべきだというのが本稿の主旨だが、それを言うためには、まず、「ネイチャーライティングとは何か」をある程度はっきりさせておかなければならない。

たとえば、トマス・J・ライアンなどは、「ネイチャーライティング自身は固定的な体系化に容易に安住するものではないし、活力と多様性の重視こそがこのジャンルの持ち味なのだ」という前提に立ちつつも、「自然に関する文学」が備える三つの局面、すなわち「博物誌に関する情報」「自然に対する作者の感応」「自然についての哲学的な考察」がどの程度の割合で現れているかによって、それを七つの範疇に分類してみせている。「野外ガイドおよび専門的な論文」「博物誌のエッセイ」「逍遙」「孤独と僻地での生活」「旅行と冒険」「農場の生活」「自然における人間の役割」の七つだが、そのうちの「逍遙」の説明は以下の通りである。とりあえずは、『いなかの生活』が持っている本質的な特徴を見事に言い当てていると思われる。

自然の中での体験——戸外の感覚、凝視する喜び、小さなものを凝視することで得られる新たな発見——が、事実そのものとほとんど同じ比重を占めるようになる。博物誌と著者の存在がバランスをとっている範疇、それが「逍遙」である。これはアメリカには古くからある形式で、著者が自然の中に入って行き——通常は、自宅近くでちょっとした遠出をおこない——、観察者、参加者として、その散歩のさまを記録するというものである。こうした例の典型を挙げるとすれば、ジョン・バローズのほとんど全作品がそれにあたるだろう。最初期に出版されたバードウォッチングの記録『エンレイソウ』(1871年)以降のすべての作品である。バローズ自身の人柄、自然の風景との接し方が、著作の大きな部分を占めるとともに作品の成功にも寄与している。故郷の森や畑に対する思い入れ——アメリカ文学全体の中で、バローズほど故郷にこもった人物はいない——もまた「逍遙」の大きな特徴である。バローズは、ニューヨーク州キャッツキル山系近くに点在する農場や森と一つになっている。「逍遙」の作家は普通あまり遠くにまでは行かず、原生野生に足を踏み入れることもまれである。近くにあるもの、しばしば牧歌的なものを愛情を込めて調査する。しかし、特定の地域を扱い、人の手の加わった土地を舞台にしているからといって、「逍遙」は決して底の浅い範疇ではない。¹³⁾

引用文中のジョン・バローズをスーザン・フェニモア・クーパーに、『エンレイソウ』を『いなかの生活』に、「ニューヨーク州キャッツキル山系」を「ニューヨーク州オツィーゴ湖畔」に読み代えれば、そのまま何の違和感もなく、『いなかの生活』の基本的な構造を立派に説明していると思う。3月に始まり2月に終わる一年間の日誌の中で、語り手スーザンは、パラソルを片手にほぼ毎日のように森を散歩したり、馬車でドライブしたり、湖面で舟遊びに興じたり、雪原の斜面で橇遊びを楽しんだりしながら、その際に目にした動植物の生態、森、湖、村の佇まい、人々の生活のさまについて事細かに報告し、¹⁴⁾教育熱心だった父親のお陰で培った広範な知識を披瀝しつつ、多岐多様にわたる話題を展開しながら、『ウォールデン』の対極にあるような素朴な文体で、¹⁵⁾自らの見解を述べてゆくからである。

では、作品の基本的な構造はライアンの言う「逍遙」に当てはまるものだと仮定して、肝心の中身の方はどうだろうか。次に引用するのは作品冒頭近くにある3月20日月曜日と3月24日金曜日の日記の全文であるが、いずれにおいても、先に引用したライアンの「逍遙」の条件——「自然の中での体験が、事実そのものとほとんど同じ比重を占め」、「博物誌と著者の存在がバランスをとっている」——が見事なまでに満たされていることを確認しておきたい。

3月20日月曜日

午後、カエデの木々の下を歩いていると、隣接する他の木々には氷も雪もついていないのに、何本ものカエデが低い枝先から小さな氷柱をぶら下げている。その一本を折ってみると、樹液が凍ったものだと分かった。枝からにじみでた樹液が夜の間凝固したものだ。樹木に自然のキャンディーが生えたみたいなもの。こういう小さな氷柱はすごく透き通っていて、砂糖水みたいなほのかな甘みがある。今の季節、サトウカエデの幹や枝が樹液でたっぷり濡れていることがよくある。裂け目があるような箇所が特にそうで、樹液はそこから溢れ出てくる。枝から樹液がしたたり落ちている光景がしょっちゅう目にはいる。きっと、こうしたことから、インディアンが最初に樹液の甘さを発見したのだろう。こんなに多くの樹液を出すのだから、樹木も傷んでしまうだろうと人は思いがちだが、そんなことはない。毎年春になると何ガロンもの樹液を出すけれど、樹木の方はまったく健康そのものなのである。

3月24日金曜日

季節の変化の影響を最初に示す植物は、よその土地なら、繊細なマツユキソウであったり、香り豊かなスマレであったりするのだろうが、この地方では、それとは似ても似つかぬ植物である。気の早い樹木が芽吹き始めたり、草がほんの微かな緑を帯び始めるずっと前に、雪と氷の間から、ザゼンソウ（スカンク・キャッベジ）の仏炎苞^{ぶつえんほう}が顔を出す。土の全体がまだ霜に縛られているときに、春の到来の間近を知る植物がいるというのは不思議だ。でも、二月の末、もしくは三月の初旬になると、ザゼンソウは時の流れを感知して、池や流れの堤のぬかるみから顔を出すのである。私たちにとっては、ザゼンソウは冬の植物みたいなもの。浅黒の仏炎苞^{ぶつえんほう}はとってもハンサムで、若いときには、紫、黄緑、黄色の斑が入っている。その内部には肉穂花序^{にくすいかじよ}があり、それは色といい形といい小さなパイナップルそっくりで、小さな突起でおおわれ、それぞれの突起から紫色の花が開く。とってもありふれた花だが、夏の幅広のつやつやした葉っぱならよく知っているという人でも、花を見たことはない、こんなに早い時期に開花するなんて知らないという人は多い。強烈な悪臭の方が有名である。あるアメリカの植物学者は「いかにも名前負けしない植物だ」と述べたけれども、それはあまりにひどすぎないか。植物をスカンク呼ばわりするほどの侮辱はないだろうから。

いずれの日記も、「自然についての哲学的な考察」には欠けるものの、「博物誌に関する情報」「自然に対する作者の感応」はたつぷりと盛り込まれている。3月20日の日記は、当時の村では甘味料の代名詞であったカエデ糖を産出するサトウカエデに言及し、その樹液が作り出す「自然のキャンディー」の甘さに舌鼓をうつスーザンの姿を描いたものである。コケモモの「とりわけ風味のよい本質的な部分」を味わう、「表面についている白い粉」¹⁶⁾を大切にするソローの姿を彷彿させるような記述である。3月24日の日記では、ザゼンソウに対する細かな観察、その背景にある博物誌的な知識、ザゼンソウに寄せる語り手の優しい思いがバランスよく配置されていて、そこから、春を待ち遠しく思う気持ち、その最初の徴候を見つけた喜びがしみじみと伝わってくる。

だが、ライアンが用意してくれたこの物差しではどうも目盛りが粗すぎて、あまり実用には適さないように思われる。『いなかの生活』のどこを引用しても、上述した二つの局面が散見されてしまい、どこをどう紹介していいやら分からなくなってしまうというのが実状だからである。もう少し目盛りの細かな物差しが欲しいところである。そこで次に、ローレンス・ビュエルが「エ

ンヴァイランメンタル・テキスト」を定義するに際して用いた、さらに厳しい四つの条件を、物差しとして利用してみようと思う。ビュエルが「環境を志向する作品」の構成要素として挙げた要件は次の四つである。

- 1 人間以外の環境が、作品の単なる枠組みとしてではなく、人間の歴史と自然の歴史の結びつきを示す形で提示されている。
- 2 人間の関心・利益が唯一合法的な関心・利益ではないのだと理解されている。
- 3 環境に対する人間の責任が作品の倫理的志向の重要な一部となっている。
- 4 環境は一定不変の既知のものではなくて、ひとつのプロセスだという意識が、作品の中に少なくとも示唆されている。¹⁷⁾

ビュエルが挙げた一番目の要件を筆者なりに言い換えてみれば、気候、地勢、山、川、湖、森、そこに生きる動植物が作品の単なる背景幕に終わらず、人間との、人間生活との密接な関わりを描出するものとなっているか、ということであろう。それならば、先に紹介した3月20日の日記を思い出すだけで、その条件が満たされていると言える。そこでは、スーザンが口にしたサトウカエデの樹液の甘さそれ自身が主たる記述の対象であり、「小さな氷柱」をしゃぶっているうちに、これを最初に発見したのはインディアンではないかという思いにまで至る。サトウカエデに記述の焦点がぴったりと合わされつつ、語り手と対象との束の間の交感を描かれ、さらには歴史を遡って、サトウカエデと土地の人々の生活との深い結びつきまでが示唆されていると納得できるはずだ。ついでに言うなら、ここでのサトウカエデの紹介は、本格的なカエデ糖の産出を詳細に描き出す4月1日の日記の伏線ともなっている。

だが、今述べたような物言いも、多かれ少なかれ日記のほぼ全体にわたって当てはまるので、しばらくは、スーザンが『いなかの生活』で見せている変な癖を取り上げて、人間の歴史と自然の歴史を結びつけようとするスーザンの姿勢を、「名前へのこだわり」の中に見てみようと思う。

スーザンは先に引用した3月24日の日記で、ザゼンソウが「スカンク・

キャッベジ」と呼ばれていることを取り上げ、「それはあまりにひどすぎないか。植物をスカンク呼ばわりするほどの侮辱はないだろうから」という感想を述べていたが、名前と実体との間のギャップの指摘、あるいは、命名にまつわる由来の紹介など、名前に対するこだわりは枚挙に暇がないほどだ。キバナノクリンザクラが「雌牛の前掛け」と間違っ呼ばれている(5月1日)、メイ・スターを「チビの常緑樹」と呼ぶ人がいるが、これはこの植物に対する侮辱であり、村人の常識が疑われるという指摘(5月25日)、オランダ系の先祖たちが、聖霊降臨祭の頃に花が咲くことから、アザレアを「聖霊降臨祭の花」と呼んだという紹介(6月7日)などがあった後に、6月23日の日誌は、ほぼ丸ごと名前についての議論に割り当てられている。子供ばかりか大人までもがバラやスマレ以外の植物の名前には無知であると嘆いた後に、アメリカの野生の花の名前がきわめて不満足な状態にあり、別の種類のヨーロッパの植物の名前を代用したもの、英語の名前を持たず、「無骨な、ラテン語の学名」を用いている場合さえある現状が指摘される。「今現在咲いている花、日々の出来事と死んだ言語とが、何の関係を持っているというのか」と憤慨する一方で、「昔は、花には可愛い自然な名前がつけられていた」と述べて、「人々に科学的知識が浸透する以前、世の中に素朴さが残っていた時代」の、民衆の生活と密着していた花々の名称が長々と列挙される。その一部だけを紹介すると、「サクランボの頬をした娘」「陽気な若者」「牛の目」「カラスの足」「牛の尻尾」「バター皿」「ウサギのベル」「牛の唇」「ワインの花束」「飛び跳ねているベス」「ぼろ切れロビン」「独身男用の縫いつけ不要ボタン」「キツネの手袋」「僧侶のフード」「愛しのシシリー」「愛しのウィリアム」「心の慰め」「真実の愛」「羊飼いの財布」「婦人用肌着」「壁の花」等々だ。最後に「アメリカの詩人にもアメリカの花を甘く素朴に歌って欲しいと思うなら、そうした花々が自然で喜ばしい名前を持つよう配慮しなければならない」と述べて、この日の日記は締めくくられる。

ここで展開されている議論、植物の名前へのこだわりこそは、野生の花と人々の生活とを密接なものにしておきたいというスーザンの願いのあらわれであろうし、こうした願いは、とりもなおさず、ビュエルが述べた「人間の歴史と自然の歴史の結びつきを示」しているだろう。名前は単なる名前に留まらず、人々の生活との絆を示す証であり、そうした絆の切断、証の消滅は、花々にとっても、人々にとっても不幸であることをスーザンは深く自覚していたのである。¹⁸⁾

これ以降も、「パイプの火皿」(ギンリョウソウモドキ)の紹介(7月18日)、

「カナダの人魚」の名前に名前負けする地味な水生植物の紹介（7月24日）、ネジバナが「女性の長い髪」と呼ばれるゆえん（9月7日）、トンボがフランスでは「年若い淑女」でありながらイギリスでは「ドラゴン」になる不思議（10月7日）、スイカズラ科ガマズミ属の低木には「旅する樹木」の名前よりは「足枷の茂み」の名前の方がふさわしいという議論（10月14日）、アメリカヘラジカを指すムースという名前はインディアンの言葉で「樹木を食べるもの」の意味だという紹介（1月22日）など、名前に対するスーザンのこうしたこだわりは、作品を通じて終始一貫して見られる姿勢である。そればかりか、スーザンのこうした名前へのこだわりは動植物だけには限定されず、2月7日の日記では、アメリカ人はそもそも名前をつけるのが下手だという議論にまで及んでしまう。共和国そのものの名称にはじまって、州、地方、都市、町や村、川、湖、山それらのすべてに「馬鹿げた名前」をつける例があまりにも多すぎると糾弾される。¹⁹⁾ 州の名前と都市の名前がともにニューヨークである不都合、美しい村の名前がネブカドネザルヴィルであったりサウスウエストカトーであったりホッテントポリスであったりする滑稽さが指摘され、「人が居住する地域にそうした名前をつけるなどは、大逆罪にも値する犯罪行為だ」とされる。名前に対するスーザンの恨み辛みの根深さが実感されよう。その一方で、インディアンの言葉に由来する名称だけは「まともな名前」として推奨できるとして、ミシシッピー、ミズーリ、オハイオ、アラバマ、オールタマホー、モノンガヒーラ、サスケハナ、ポトマック、ヒューロン、ミシガン、エリー、オンタリオ、ナイヤガラといった名称が「ヤンキーの命名法によって蹂躪」されなかったという事実を喜んでいる。「音と意味がひとつになっている」からというのが表向きの理由なのだが、ネイティブアメリカンの生活と密着した自然風景を、たとえ名前という形であっても残しておきたい、残さねばならないとするスーザンの思いの吐露と読んでおくべきだろう。²⁰⁾

さらに付け加えるなら、名前へのこだわり以外に、作品には動植物にまつわる民間伝承の類、そうした伝承と人々の生活との密着ぶりを示す報告もふんだんに盛り込まれている。サトウカエデから人々がいかにしてカエデ糖を産出するかについての詳細な報告（4月1日）、ユキノシタが湯焼けや火傷の治療薬として用いられていた事実（5月25日）、ハチドリが家族に愛のメッセージを運んでくるという言い伝え（6月15日）、独立戦争中、サンザシの棘が女性にとってはピンの代用であったり（6月16日）、ヤマモモが止血剤として、またその葉が紅茶に利用され（8月3日）、トネリコ、クロトネリコが弓

矢の材料として、またトネリコは古代から槍の柄として用いられてきたという紹介(8月7日)、南部のインディアンはワタリガラスに病気の治癒を祈り、ミズーリ族は戦いの衣装にその羽を用いるという報告(1月29日)等々、これまた枚挙に暇がない。スーザンにとっては、アメリカの博物誌、地誌とは、なかんずく、アメリカの歴史そのもの、土地で生活を送った人々の記録そのものであったのだと理解されるのである。

ある研究者は「バイオリージョナリズム」という用語の説明の締めくくりとして、「文学史的に見れば、バイオリージョナリズムはその起源をヘンリー・ソローのウォールデンの森での実験に求めることもできるはずである」と述べている。²¹⁾だが、これには修正が必要であるかもしれない。すなわち、「その起源をスーザン・フェニモア・クーパーのクーパーズタウン周辺の散歩に求めることができる」と。略年譜で明らかのように、『いなかの生活』の出版は1850年、『ウォールデン』の出版は1854年だからである。

次に、ビュエルが提示した二番目の要件、「人間の関心・利益だけが唯一合法的なものではない」点を『いなかの生活』がどの程度理解しているかを検討したい。ただし、先に引用した3月24日の日記に見られる、スカンクなどという名前をつけられてザゼンソウは可哀想だ、というような素朴な感情移入のレヴェル、対象に寄せる優しい眼差しなどということを出せば、これまた、作品の全体にわたってそうした眼差しが注がれていると言うしかない。ここでは、人間の関心・利益以外の何かがある程度明確に意識され、それが擁護されていそうな例を見ておきたい。そうした例は、たとえば3月11日の日記の後半部にさりげない形で現れている。

ガッカリするような事柄が私たちを待ち伏せていた。古い友人であり、大好きだった高貴なるマツの木が数本、冬の間、私たちの知らないうちに、切り倒されていた。かくも長い間、あの素晴らしい木々が常緑の腕を揺らしていたのに、その場所の名残といえ、醜い切り株と大鋸屑の山だけになっていた。マツが伐採されたせいで、周囲の野原の雰囲気までがすっかり変わってしまったようだ。木立が一つあるかないかで、周囲何エーカーにも及ぶあたり一面の景色が変わってしまうことも多いのである。

人間の都合でマツを伐採し、「醜い切り株と大鋸屑の山」だけが残ったが、それによって、「周囲の野原の雰囲気」「周囲何エーカーにも及ぶあたり一面

の景色」がすっかり変わってしまったという嘆きである。それだけの嘆きであるが、見方を変えれば、ここには人間の関心・利益と対置する形で「野原の雰囲気」「一面の景色」が提示されており、人間の都合でおこなったマツの木立の消滅が、マツの消滅だけには留まらないもっと大きなものの損傷に繋がっているという意識がある。こうした意識は、7月28日の日記では、「筋金入りの功利主義者なら文句を言いそうな」場所に立った一本のニセアカシアを避けて、公道をカーブさせたという「喜ばしく」「幸いな」事例の報告となって現れている。同じく7月28日の日記には、「ドルとセントで勘定される市場の価格とは独立して、木々には別の価値がある」と明記されるし、9月11日の日記には、道路の拡張に伴う教会附属墓地の移転を取り上げて、「父祖の遺骨を売り払って、ポケットの中で少しばかりの小銭をちゃらつかす」という愚かさが嘆かれ、11月3日の日記では、キャプテン・キッドの財宝を捜して「不思議な樹木」の根元を掘り起こし、それを枯らしてしまった男たちの愚考が糾弾されている。このように、スーザンには樹木や森は保護すべきだという確たる信念があるし、²²⁾ とりわけ、功利主義一辺倒のものの見方に対する嫌悪感はやがてに激しいと言える。

それでは、ビュエルが二番目の問題提起をしたときにおそらく想定したであろうと思われる「自然の権利」というような意識をスーザンがどこまで持っていたかとなると、話は少々怪しくなってくる。3月11日の日記で見たように、確かに「野原の雰囲気」「一面の景色」にまで及ぶ損傷が指摘されはしても、所詮それは語り手、観察者であるスーザンにとっての心地よさの損傷に還元されてしまいかねない危険を伴っているからである。

この点が端的な形で現れているのは、人間にとっての森の価値を論じた7月28日の日記である。「森というのは人間に対する何と高貴な贈り物だろう。その有用性、美に対して、我々はどれほどの借りがあり、どれほどの賞賛の念を覚えることだろう」で始まるこの日の日記は、「神の御業」「創造主の御意志」としての「森の野性的な息づかい」を称え、「生命に溢れた美の躍動」を、「多様な美が織りなすこの豊饒さの中の、甘美な静寂、高貴な調和、穏やかな安らぎ」を称える。スーザンは、「森の価値と重要性」を、「森の相対的な価値」を忘れていたアメリカの農夫が多いと嘆きながら、また、木々には「ドルとセントで勘定される以外の別の価値がある」と指摘しながら、それでは、そうした「価値」とは何かという段になると、「[その価値は]多くの点で、国の文明化と関係している。知的、道徳的な意味で重要なのである」と述べるに留まってしまう。森の重要性は、「戸口に緑豊かな巨木がある方が、応接

室に高価なマホガニーとヴェルヴェットのソファを置くよりもはるかに望ましい」という形に矮小化されてしまう。森はマホガニーとソファの代名詞に成り下がってしまう。人間の文明下に従属してしまう。ここには、ソーザンが提示したような、人間の文化と対置したもう一つの文化としての野生の宣言²³⁾は見られない。あくまで、森の功利的な価値以外の「相対的な価値」——審美的、道徳的価値——にも目覚めよというのがソーザンの主張であり、それはそれで意味のある主張ではあろうが、同時に、それがソーザンの限界ともなっている。これは、神から与えられた「贈り物」として森を見る限りは、当然支払わなければならない代償であるとも言える。²⁴⁾ そういえば、ソーザンは安息日を遵守して、その日は日記の執筆を差し控えていたものだった。²⁵⁾

同じように、5月30日の日記では、泉の水の素晴らしさを称えた後に、こうした泉が人間だけの専有物ではなく、少し前までは、さまざまな生き物(インディアンを含む)²⁶⁾によって利用されていたことが回顧される。また、「現在は我々が所有していると呼んでいる泉」というような持って回った表現には、「所有」にまつわる数々の疑念が暗に提示されているとも言えるだろう。だが、ここでの「回顧」はあくまでも「回顧」に留まり、ネイティブアメリカンを含む野生の生き物には、生存するための彼ら固有の権利があるなどという論の展開にはならない。「同じ生命が流れている存在」としての認識はあっても、「彼らが存在した痕跡」が今ではほとんど残っていないという事実が嘆かれるばかりである。(なお、7月23日の日記にも、昔の森の名残としてのマツの木立、原生自然の生き証人としての孤立したマツの木々の消滅が取り上げられているが、ここでも主たるトーンは回顧、挽歌の域を出るものではない。) 遣り手の土地開発業者であった祖父の血を継ぐ孫娘ソーザンであってみれば、「人間の関心・利益」を「唯一合法的」として開拓を推し進めてきた結果生じた諸々の死に対して、哀悼の意を表することが精一杯の誠意の表明であったとも言えるかもしれない。ソーザンが読み上げる弔辞は、次のような調子のものである。(5月30日の日記の結び)

森の木陰で、こうした気ままに流れる泉の畔に立っていると、自然にインディアンのことが思い起こされる。どこよりも生き生きと、今は消え果てた種族がうろつき回っていた姿が思い出される。こうした丘の間にあるどの泉でも、狩りや敵対行為中のインディアンの勇者が一万回も跪いて、のどの渇きを癒したに違いない。また、野生の生き物も、敵や味方と同じようにそう

したことだろう。黄褐色のピューマにしろ、ぶきっちょなクマにしろ、臆病なシカにしろ、吠えたてるオオカミにしろ、昔は、四季を通してこの澄んだ水を飲んでいただろう。いな、このあたりの丘の奥深くに、まだ白人が知らない泉が隠されていて、そこでは野蛮人や猛禽がいまだに水を飲んでいるかもしれない。こうした思いが募るにつけ、森の木々の瞬く影が、ごく最近までこのあたりをうろついていた野生の生き物の姿に見えてくる。臆病な雌鹿や悪賢い山猫が再び近づいてきて、足元の泉から水を飲む姿が目についてしまう。乾いた枝の折れる音、葉がそよぐ音を耳にするたびにギクツとして、目も彩な彩色を施した戦士が、火打ち石の鎌をつけた矢と石の手斧を携えて、森を抜けて私たちの前に現れるのではないかと思ってしまう。そうした存在が森に住んでいたのはほんの昨日のこと。私たちの血管を流れているのと同じ生命が流れている存在が、日々の飲み水をその泉から、現在は我々が所有していると呼んでいる泉から飲んでいたので。昨日まではここにいたのに、今日では、彼らが存在した痕跡は私たちの間でほとんど指摘されることがないのである。

以上見たように、ビュエルの第二の要件「人間の関心・利益だけが唯一合法的なものではない」という理解は、功利主義的な自然観への反発というレベル、さまざまな動植物、ネイティブアメリカンに寄せる共感・同情（根深い恐怖の念とない交ぜになっている点に留意）というレベルでは満たされている。ただし、無い物ねだりを承知で言うなら、同等の「他者」としてその存在が認められるべきだとする認識にまでは至っておらず、そうした存在を絶滅に向かわせた布教・文明化・開発の名の下での野蛮行為への自覚・反省も十分であるとは言いがたい。むしろ、次に引用する7月17日の日記の結びが明らかにしているように、ネイティブアメリカンが苦境に陥っている責任の一端は当事者にもあるとでも言わんばかりの口調であり、²⁷⁾そこから引き出される「教訓」は、何とも白々しく聞こえてしまう。

事実、インディアンと白人が大西洋沿岸で出会ってから三世の間、インディアンのためになされた事柄がいかに少なかったか、それを思うと心が痛む。でも、それが人の世のならいというもの。野蛮な人種は文明人との初期の接触によって、ほとんどの場合、改善の道に行くよりは墮落の道を進んでしまった。文明の利点をきちんと理解する術を学ぶ以前に、文明の悪徳に苦しんだのである。国家にしても個人にしても同じで、改善への道のりは遅々

としており、墮落への道のりは一足飛びなのである。

だから、ビュエルが提示する第三の要件、「人間が環境に対して負うべき責任」についても、スーザンは言うべきことは言っているが、現在の我々から見れば、踏み込みが足りないという印象は免れがたい。たとえば、7月28日の日記では、何の躊躇もなく木々の伐採に血道を上げる農夫に対して、次のような果たすべき役割が提案される。

森や林に少し注意を払うだけで、このあたりの農家の多くがどれだけた易く改善されることだろう。その外観を改善してくれ、同時に、市場での価値も高めてくれる。森の木々を間引きしても良いが、全滅させてはならない。伐採は、直ぐに耕地とする土地に限られるべきだ。丘のてっぺんや荒れた斜面では、森を残しておく。あちらこちらの小さな丘は低林としておく。小川や水路の岸には、藪や若木を自由に生えさせておく。必要とあらば、多くの農家に見られる水たまりの岸辺に木を植える。泉の畔には1～2本のニセアカシアを残しておく。また、井戸にはヤナギが張り出すようにする。門や柵の近くには、1～2本のクリまたはオークもしくはブナを植える。しばしば目にする光景だけれど、夏に家畜に木陰が提供できるよう、すべての草原にそうした樹木を数本点在させておく。また、家に木陰を提供するよう、数本の木もしくは一本の木を植えるというようなことだ。こうしたすべての事柄を成し遂げるために求められる手数、費用はいかに小さく、その効果の程はいかに望ましいものであるか。かくして農家やその近隣に与えられた好ましい性格は、必ずや思慮深い人間の認めるところとなるだろう。

何とも慎ましやかな提案であり、「改善」や「好ましい性格」に至上の価値が与えられたパストラルの再現・保持がスーザンのひとつの理想であり、限界でもあったことがここでも露呈している。「調和」「共存」「静けさ」「安らぎ」「誠実」「祈り」「清貧」といった価値観の中で生きていたスーザンであってみれば、これはこれで致し方のないことであつたろうし、その作品が出版当時は相当な売れ行きを見せながら、現在では「無視され」「忘れられている」というのも、その原因の一端はこうしたところにあるのかもしれない。²⁸⁾ 時代を突き抜けるといった、ソローには見られたような勢いがスーザンには見られないのは事実だろうから。だが、急いで付け加えるなら、それこそがスーザンの持ち味であったとも言える。良きにつけ悪しきにつけ、ひとつの枠の

中に留まり、その枠内を散策し、その枠内で眺め、思索するというのが、「逍遙」の範疇の大原則であったことを思い出しておこう。²⁹⁾

そうしたさまざまな枠内であるとはいえ、「無頓着な農業法」を難ずる6月27日の日記、都市計画プランに名を借りて父祖の埋葬地を掘り起こすという野蛮行為を非難する9月11日の日記、キャップテン・キッドの財宝を求めて生きた樹木の根を掘り起こすという野蛮人顔負けの行状を指弾する11月3日の日記など、いずれもスーザンなりに、環境に対する人間の果たすべき責任を述べたものである。また、見落としてしまいそうだが、ヒメレンジャクを描いた6月1日の日記の一節も、人間の貪欲さ、その近視眼的な行動を暗に非難する文章だと言えるだろう。(同じ物言いは、クリの木に激しい攻撃を仕掛ける男の子を描いた10月4日の日記にも適用されているだろう。)

ヒメレンジャクが果樹の花の間で大変な騒ぎを起こしている。また、いまだに菜園にも出入りしている。雛の世話に忙しい短期間を除いては、いつも群れで行動するので、果実であれ花であれ、攻撃を加えるすべての樹木にその痕跡を残してしまう。先週、花の中心部に達しようとするあまり、花卉をシャワーのように撒き散らしているヒメレンジャクを見た。むろん、そうになると若木は痛めつけられる。ヒメレンジャクはこうして自らを敵に回している。というのも、連中ほどに果実が好きな鳥はいないからだ。また、連中は好みにあったベリーを見つけたときには、貪欲なまでにそれを喰い尽くしてしまう。ときには、飲み込みすぎて自滅してしまうのである。

最後に、ビュエルの言う「環境がひとつのプロセスだという意識が作品の中に少なくとも示唆されているか」という第四の要件に答えるなら、示唆されているどころか、おおいに顕在している、作品の全体がそうした移り行くものとしての環境の記録となっていると言える。まず第一に季節の移ろいが詳細に記録されており、この点では、本書の右に出るものはないのではないかと思われる。(強いて挙げるとすれば、ヘンリー・ベストンの後期のエッセイ『北の農場』³⁰⁾の中の、一連の「農場日誌」の部分がこれに近いかと思う。)『いなかの生活』の真骨頂は、こうした四季の移ろいが織りなす細部の記録にあると言っても過言ではないだろう。「春」の中から主な項目だけを列挙しておこう。

3月4日、新雪、橇遊び。7日、アビを目撃。10日、コリンウズラ来訪。18日、湖の氷は8～10インチ。22日、コマツグミの来訪を首を長くして待つ。³¹⁾

23日、雪で道路がぬかるみ、駅から村まで10～11時間掛かる。28日、雪解け。4月3日、今年初めての森への散歩。4日、今年初めてのカエルの歌。6日、湖の解氷が進む。11日、ムクドリモドキの来訪。15日、今年最初の野生の花イワナシを発見。18日、カワカマス釣り。³²⁾ 22日、ツバメの到来。26日、農作業始まる。27日、今年最初のハチドリ。クロムクドリモドキの来訪。5月1日、森に花摘みに出掛ける。6日、歓喜のまっただ中にいる鳥たち。15日、木々の芽吹きが始まり。17日、コメクイドリ。カエルの合唱。18日、スマイレの群生を見つける。19日、夕べの気はさまざまな春の香りに包まれている。22日、リンゴの花の芳香。トウモロコシを植える。25日、森の花々が咲き乱れている。29日、ヘビを発見。28日、湖で舟遊び。31日、バラを捜したが無駄だった。6月1日、ヒメレンジャク。4日、トウモロコシ畑で案山子の飾りつけ。6日、寒くて、暖炉に火を燃やす。去年は、今日イチゴを食べたのに。7日、アザレアの花盛り。8日、野生のハトの大群。12日、去年より2週間遅く、バラが咲く。14日、ホイッパーウィルヨタカ、ナイチンゲール。18日、野生のバラの花盛り。19日、イチゴを食べる。20日、ニセアカシアの香りが村を包む。

こうした細かな観察が一年にわたっておこなわれ、それが記録され、それぞれの事項にまつわる該博な知識によって肉づけされ、深みが与えられる。ひとつだけ例を挙げておこう。3月7日、アビを発見した日の記述の前半部分であり、1852年10月8日の日誌の中にソローが「ミス・クーパーも同じことを言っている」として言及した箇所だ。³³⁾

暖かくて、雪が融けている。川の近くを散歩していると、大型の水鳥が三羽、北に向かうのが目撃された。アビだろうということになった。頭上の木立のせいで、姿が見えたのは一瞬だったが、通り過ぎる際に発した大きな叫びは、いかにもアビの叫びのように聞こえたからだ。アビは普通は4月1日頃に最初に姿を見せ、夏から秋まで私たちと一緒に過ごし、12月の末になると、海岸に向かう。多くはロング・アイランドあたりで冬を過ごし、さらに多くがチェサピーク湾で冬を過ごす。異常に大きな別のアビの一羽を見たのは、さほど以前のことではなく、それは重さ19ポンドもあった。セネカ湖で、漁師が延縄と呼ぶ網に掛かったものだ。その網は95フィートの深さに設置されていたのに、アビは餌に惹かれてそこまで深く潜ったのだ。他にも数羽のアビがセネカ湖で同じようにして捕らえられている。延縄は80～100フィートの深さに設置されていた。アビでなくても鳥は深く潜ると言うと、疑う人が

いるかもしれない。でも、もっと小型の鳥、カワガラスの場合には、水掻きも持たないくせにアビ以上に水中になじんでいるのである。

第二に、本書『いなかの生活』は、さまざまな動植物の減少、矮小化を記録しているという意味でも、「環境が一定不変の既知のものではない」と語っている。先ほど「春」の主な事項を列挙する際に垣間みたように、一方では豊饒な自然を描きつつも、スーザンの眼差しは衰弱しつつある自然のさまをしっかりと見据え、それを克明に記録している。上述したような一定の限界内のこととは言え、こうした点は（再）評価されてしかるべき事柄であると思う。今から150年前にスーザンがすでに記録した（ネイティブアメリカンをも含む）動植物の衰退のさまを列挙しておこう。

かつては谷全体をおおったこともある野生のハトの群れ（3月27日、9月19日）、最近では減少しつつあるクロムクドリモドキ（4月27日）、ムラサキツバメ、ショウドウツバメの減少（5月4日）、40年前と比べるとその数が激減したムラサキサラセニア、アメリカアツモリ、アザレア（5月19日、6月7日）、かつては森に溢れ、泉を利用していたピューマ、クマ、シカ、オオカミ、インディアン（5月30日、7月23日）、40年前にはナイチンゲールの数はもっと多かった（6月14日）、村を訪れた三人のインディアン女性のさま、文明の悪徳にさらされたキャンプ地でのインディアン男性の目をおおいたくなるようす（7月17日）、昔のように途轍もない大きさに達する樹木は少なくなった、二次林であるせいか（7月28日）、オークの森も消滅しつつある、シカも姿を消してしまった（8月9日）、アメリカヘラジカの姿が見られなくなった（8月31日、1月22日）、オツィーゴ・バスの減少と最近の小型化（11月8日）、一目で良いからピューマが見たい（12月1日、12月14日、2月9日）、近辺から絶滅したバイソンとトナカイ、ビーヴァーの数も激減した（2月13日）等々の記録は、先に述べた四季の移ろいとは別の意味での、「ひとつのプロセス」としての自然のありようを痛々しいまでに証言していると言えるだろう。

結び

以上、スーザン・フェニモア・クーパーの『いなかの生活』の再評価をもくろみつつ、第一章ではスーザンの略年譜を作成し、第二章では、作品がまずトマス・J・ライアンの提起した「逍遙」の範疇に適合していることを確認し、次いで、ローレンス・ビュエルの唱える四つの要件をどの程度満たしているかを検討した。その過程で、作品が内在させている一定程度の限界も明

らかになったが、一方で、この作品の持つ独自の魅力も紹介できたのではないかと思う。筆者が最初に抱いた印象、『ウォールデン』を凌ぐという印象はさておき、『いなかの生活』は『ウォールデン』にも比肩すべき作品であり、少なくとも、『ウォールデン』のある部分を取って、また、『ウォールデン』には欠落しているある部分を保持している作品であると言うことはできると思う。前者の「ある部分」とは、バイオリージョナリズムの先駆けの謂いであり、後者の「ある部分」とは、博物誌・地誌としての記述の綿密さ、「小さなものを凝視」し「愛情を込めて調査」という「逍遙」ならでの眼差しの謂いである。³⁴⁾

註

1. 大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之輔編『総説アメリカ文学史』（研究社出版、1975年；第4版、1977年）66.
2. Lawrence Buell, *The Environmental Imagination: Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press 1995 本書におけるビュエルの主張のひとつは、「アメリカ文学の黎明期から、女性のネイチャーライターは存在したのであり、こうした女性の手になるネイチャーライティングを含む広い視点からソローを読めば、ソローの文化的な意味合いを、アメリカン・ネイチャーライティングとは何かを問い直せるだろう」（27）という主張であり、彼女たちに共通して見られる特徴を「ペルソナの脱主体化」と「知覚の中心の拡散」（177）に求めている。なお、ダン・シーズはこのビュエルの研究書を「エコクリティシズムのランドマーク」と呼んでいる。Don Scheese, *Nature Writing: The Pastoral Impulse in America*. New York: Twayne Publishers. 1996. xxi
3. 同書、47、406
4. Susan Fenimore Cooper, *Rural Hours*. Syracuse, New York: Syracuse University Press. 1968 本書をテキストとして使用した。
5. Thomas J. Lyon, ed., *This Incomperable Land: A Book of American Nature Writing*. Boston: Houghton Mifflin Company 1989. なお、同書の抄訳が拙訳で出版されている。『この比類なき土地：アメリカン・ネイチャーライティング小史』（英宝社、2000年）。
6. Robert Finch and John Elder, eds., *The Norton Book of Nature Writing*. Boston: W. W. Norton 1990
7. Scott H. Slovic and Tellell F. Dixon, eds., *Being in the World: An Environmental Reader for Writers*. New York: Macmillan Publishing Company. 1993

8. John Elder, ed., *American Nature Writers*. 2vols. New York . Charles Scribner's Sons. 1996. vol. 1. 187-198. マドックスは『いなかの生活』を「アメリカン・ネイチャーライティングの小さな古典とみなされつつある書」(187)と呼び、また、「1968年に縮刷版が出版されたのに、現代の読者・批評家は彼女の作品の発見に手間取っている」(198)と述べる。
9. Rochelle Johnson, “*Walden, Rural Hours, and the Dilemma of Representation*” Included in Richard J. Schneider, ed., *Thoreau's Sense of Place: Essays in American Environmental Writing*. Iowa City: University of Iowa Press 2000.
10. Vera Norwood, *Made from This Earth: American Women and Nature*. Chapel Hill and London The University of North Carolina Press 1993 は、アメリカの女性が自然とどうかかわってきたか、エコフェミニズムにまで至るその流れを辿った、射程の長い画期的な研究書である。スーザン・フェニモア・クーパーに一章を割り、「フォアマザー」としての彼女の姿を浮き彫りにしている。なお、ビュエルも前掲書において、たびたびスーザン・フェニモア・クーパーをメリー・オースティンその他の女性作家と並べて論じている。
11. 野田賢一「ピクチャレスク・アメリカ：十九世紀風景美学の形成」、スコット・スロヴィック・野田賢一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む』(ミネルヴァ書房、1996年)所収。なお、近刊予定の『たのしく読めるネイチャーライティング』(ミネルヴァ書房)には、「スーザン・フェニモア・クーパー」の項目も収録されるはずである。
12. 斉藤真、金関寿夫、亀井俊介、岡田泰男編『アメリカを知る事典』(平凡社、1986年；第5刷、1990年)
13. 『この比類なき土地』、6-7.
14. 本稿で直接に触れることはできなかったが、『いなかの生活』は、19世紀中葉、アメリカ北東部の寒村に暮らす人々の生活を知る上でも、第一級の資料であると言える。独立記念日の祝い方(7月4日)、共進会の賑わい(9月29日)、静かな雪の選挙日(11月7日)、感謝祭の町の様子(11月23日)、雨のクリスマス(12月25日)、オランダ系住人の間でおこなわれるヴァレンタインデイの奇習(2月14日)の紹介などなど。
15. マドックスは「『いなかの生活』のもっとも複雑な局面は、素朴さの擁護にあると言ってもいいくらいだ」(前掲書、195)と主張する。なお、彼女には、スーザンの「素朴さ」をフェミニズム的な視点から論じた優れた論文がある。Lucy B. Maddox, “Susan Fenimore Cooper and the Plain Daughters of America,” in *American Quarterly* 40 (June 1988).
16. Carl Bode, ed., *The Portable Thoreau* New York: The Viking Press 1947; sixteen printing, 1972. 422.なお、『ウォールデン』の訳は、飯田実氏のものを借用した。『森の生活(ウォールデン)』(岩波書店、1995年)
17. 前掲書、7-8.
18. スーザンは「科学的命名法」に対抗するものとして「女性の文化」を提唱していると

ノアウッドは言い、エコフェミニストの先駆けとしてのスーザン像を浮き彫りにする。前掲書、278。

19. ソローも「フリンツ湖」を引き合いに出して、「われわれの命名法の貧弱さ」に言及している。前掲書、444。
20. 「クーパーの関心は、命名法を土着化し、言語をアメリカという場所の経験とひとつにすることにあった」というマドックスの指摘は当を得ている。前掲書、197。
21. 山里勝己編「ネイチャーライティング・キーワード集」、『ユリイカ』1996年3月号所収。なお、ビュエルは、『いなかの生活』を「アメリカ文学最初のバイオリージョナリズムの主要な作品である」と正当な評価を下している。前掲書、406。
22. 森の保護を唱えるスーザンに積極的な意味を見出す研究者は多い。ジョーンズ、xi；ノアウッド、35、284.；ビュエル、47。
23. たとえば「歩く」の冒頭部（前掲書、592）などがひとつの例と言えるだろう。飯田実訳『市民の反抗』（岩波書店、1997年）からの引用を挙げておく。
私は「自然」を弁護するために——単なる市民的自由や市民的教養とは対照的な、絶対的自由を弁護するために——ひと言述べてみたい。つまり、人間を社会の一員としてではなく、むしろ「自然界」の住人、もしくはその重要な一部分として考えてみたいのである。
24. キリスト教が「人間中心主義的な」自然観を育てる温床になっているという説については、Cheryll Glotfelty and Harold Fromm, eds., *The Ecocriticism Reader: Landmark in Literary Ecology*. Athens, Georgia: The University of Georgia Press. 1996に収録されている二つの論文、Lynn White Jr., “The Historical Roots of Our Ecological Crisis”とChristopher Manes, “Nature and Silence”を参照されたい。なお、後者の翻訳は『緑の文学批評』（松柏社、1998年）に収められている。
25. 『いなかの生活』の初版と1887年の改訂版を読み比べたジョーンズの報告では、初版では、安息日が守られなかったことが二度あるという。（前掲書、xxix）
26. ライアンによれば、トマス・モートンの『ニュー・イングリッシュ・カナン』（1632）、ウィリアム・ウッドの『ニューイングランドの眺望』（1634）以来、「博物誌の標題のもとにインディアンを描くことが普通におこなわれていた」とのことであり、スーザンも依然としてこうした悪習に染まっていたのである。『この比類なき土地』、48。
27. 多文化主義の視点から「アメリカンルネッサンス」のキャノンを読み直そうとする野心的な研究書、Timothy B. Powell, *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press. 2000. 77-99 は、同じ姿勢が『ウォールデン』にも見られる点を指摘し、作品からアフリカ系アメリカ人やネイティブ・アメリカンが「抹殺」され、アイルランド人が「真のアメリカ人」から排除されていることの意味を問うている。
28. 本稿のテキストとして使用したシラキューズ大学版『いなかの生活』に付したデイヴィッド・ジョーンズの序文によれば、「鮮やかな文節と退屈な文節の落差が激しい」

のが『いなかの生活』の欠点であり、『ウォールデン』に代表される、「19世紀の真に偉大な日記のひとつ足り得なかった理由だろう」(前掲書、xxxvii)と推測しているが、改訂版を読む限りは、的外れの批判のように思われる。またノアウッドは「科学、文学の世界で男性が力を持ったことが、女性がキャノンから締め出されることに繋がった」という大胆な説を唱え、「ギルバート・ホワイトが創始者であったがために、このジャンルは男性の支配するところとなった」(前掲書、48、53)と断定する。

29. こうした一定の「枠」については、マドックスは「スーザンの自然界への旅は、予期したものしか見ない。……発見ではなく、確認が彼女の仕事なのだ」(前掲書、194)と述べる。そういえば、ライアンは「逍遙」の典型的な作品としてソローの「歩く」の名前を挙げていなかったが、反語的な言い方をするなら、ソローの「歩く」は、ライアンの言う「逍遙」の範疇を突き抜けていたと言えるのではないか。
30. Henry Beston, *Northern Farm: A Glorious Year on a Small Maine Farm*. New York: Henry Holt and Company. 1994. 初版の出版は1948年。
31. ジョーンズも指摘していることだが(前掲書、xxxi)、コマツグミはスーザンがもっとも頻繁にその生態について言及する鳥のひとつである。それに対して、『ウォールデン』でのコマツグミの描写はあくまで比喩的、象徴的であり、その叙述は詠嘆的である。「ああ、ニューイングランドの夏の一日が終わるころの、夕べのコマツグミよ！彼が止まっている小枝をなんとか見つけることはできないものか！あの彼とあの小枝とを！」(前掲書、552)
32. カワカマス釣りについては、11月8日、1月11日にも言及がおこなわれ、夜釣りのさまが描かれ、これまで最大のものが7ポンドであったという事実などが丁寧に紹介されるのに対して、『ウォールデン』でのカワカマスは、「ああ、ウォールデンのカワカマスよ！」という呼びかけとともに姿を現し、比喩・象徴としての「真珠」、「ウォールデンの水の生きた結晶体」、「動物界の小ウォールデン」と称えられる。(前掲書、526)
33. Bradford Torrey and Francis H. Allen, eds., *The Journal of Henry David Thoreau*. vol. IV. Salt Lake City: Gibbs M. Smith Inc. 1984. 308. なお、何人もの研究者がこの事実を指摘し、ソローが『いなかの生活』をどう読んだかを推測している。たとえば、オドーネル、viii-ix；ジョーンズ、xxxvii；ノアウッド、53.
34. このことは、『いなかの生活』の序文と『ウォールデン』の有名な一節(前掲書、343-44)を並べてみれば一目瞭然である。なお、後のソローが次第にスーザン的なものを志向・模索してゆく点については、ビュエル(前掲書、177)とジョンソン(前掲書、191)が指摘している。

本書は、田舎の生活の四季を彩るささいな出来事を、日記形式で綴ったものである。長らく田舎暮らしを続け、野原をさまよい歩いているうちに、どうということのない事物にしばしば目を奪われ、後に、それが炉辺で思い出されて、友人と歓びを分かち合ったりする。本書の記述は紛れもない事実であり、本書に言及されているささやかな出来事のすべては、記録されている通りに起こったものである。かのフッカー氏は田舎を「神の祝福が大地から湧き出ずるところ」と呼んだが、願わくば、我らが友も本書のうちに幾ばくかの興味を見いだされんことを。

私が森へ行ったのは、思慮深く生き、人生の本質的な事実のみに直面し、人生が教えてくれるものを自分が学び取れるかどうか確かめてみたからであり、死ぬときになって、自分が生きてはいなかったことを発見するようにはめにおちいりたくなかったからである。……私は深く生きて、人生の精髓をことごとく吸いつくし、人生といえないものはすべて壊滅させるほどたくましく、スパルタ人のように生き、幅広く、しかも根元まで草を刈り取って、生活を隅まで追い込み、最低の限界まできりつめてみて、もし人生がつまらないものであることがわかったなら、かまうことはない、その真のつまらなさをそっくり手に入れて、世間に公表してやろうと考えたのである。

Works Cited

- Beston, Henry. *Northern Farm : A Glorious Year on a Small Maine Farm*. New York : Henry Holt and Company. 1994.
- Bode, Carl. ed. *The Portable Thoreau*. New York : The Viking Press 1947 , sixteen printing, 1972.
- Buell, Lawrence. *The Environmental Imagination : Thoreau, Nature Writing, and the Formation of American Culture*. Cambridge, Massachusetts : The Belknap Press of Harvard University Press. 1995.
- Cooper, Susan Fenimore. *Rural Hours*. Syracuse, New York : Syracuse University Press.
- Elder, John, ed. *American Nature Writers*. 2vols. New York : Charles Scribner's Sons. 1996. vol. 1. 187-198.
- Finch, Robert and Elder, John eds. *The Norton Book of Nature Writing*. Boston : W W. Norton. 1990.
- Glotfelty, Cheryl and Fromm, Harold. eds. *The Ecocriticism Reader : Landmark in Literary Ecology*. Athens, Georgia : The University of Georgia Press. 1996.
- Johnson, Rochelle. "Walden, *Rural Hours*, and the Dilemma of Representation."

- Included in Schneider, Richard J. ed. *Thoreau's Sense of Place : Essays in American Environmental Writing*. Iowa City : University of Iowa Press. 2000.
- Lyon, Thomas J. ed. *This Incomperable Lande : A Book of American Nature Writing*. Boston : Houghton Mifflin Company. 1989.
- Maddox, Lucy B. "Susan Fenimore Cooper and the Plain Daughters of America," in *American Quarterly* 40 (June 1988).
- Norwood, Vera. *Made from This Earth : American Women and Nature*. Chapell Hill and London : The University of North Carolina Press. 1993.
- Powell, Timothy B. *Ruthless Democracy : A Multicultural Interpretation of the American Renaissance*. Princeton, New Jersey : Princeton University Press. 2000.
- Scheese, Don. *Nature Writing : The Pastoral Impulse in America*. New York : Twayne Publishers. 1996.
- Slovic, Scott H. and Dixon, Tellell F. eds. *Being in the World : An Environmental Reader for Writers*. New York : Macmillan Publishing Company. 1993.
- Torrey, Bradford and Allen, Francis H. eds. *The Journal of Henry David Thoreau*. vol. IV. Salt Lake City : Gibbs M. Smith Inc. 1984.
- 飯田実訳『市民の反抗』（岩波書店、1997年）
- 飯田実訳『森の生活（ウォールデン）』（岩波書店、1995年）
- 伊藤詔子他訳『緑の文学批評』（松柏社、1998年）
- 大橋健三郎・斉藤光・大橋吉之輔編『総説アメリカ文学史』（研究社出版、1975年；第4版、1977年）66.
- 斉藤真、金関寿夫、亀井俊介、岡田泰男編『アメリカを知る事典』（平凡社、1986年；第5刷、1990年）
- 野田賢一「ピクチャレスク・アメリカ：十九世紀風景美学の形成」、スコット・スロヴィック・野田賢一編『アメリカ文学の〈自然〉を読む』（ミネルヴァ書房、1996年）所収.
- 村上清敏訳『この比類なき土地：アメリカン・ネイチャーライティング小史』（英宝社、2000年）
- 山里勝己編「ネイチャーライティング・キーワード集」、『ユリイカ』1996年3月号所収.